

日本戦闘的無神論者同盟の活動

田 中 真 人

は じ め に

日本戦闘的無神論者同盟は、一九三一年九月に正式に結成され、一九三四年五月に弾圧によりほぼその活動を終えた。一九三一年春からの反宗教闘争同盟準備会の活動をふくめて、その存在期間はおよそ三年であり、一九三一年一月に結成されたコップ（日本プロレタリア文化連盟）の加盟団体であり続けた。

コップ加盟の団体であったということは、特高用語でいえば「日本共産党の外郭団体」というわけだが、コミンテルンと日本共産党の影響と指導下にあったことは、まぎれもない事実である。事実、この同盟の文書からは、三一テーズ草案、さらに三一テーズの情勢分析の引きうつし、政治闘争への従属をみることは容易である。しかしながら、この三〇年代のプロレタリア反宗教運動の展開にさき立って、一九三〇年前後における「マルクス主義と宗教」論争では、より多様な立場の表明がなされていた。^①

たとえば高津正道の如く、僧籍（真宗本願寺派）の家に生まれ、仏教界の改革へのところざしと、その限界の自覚から宗教否定へといたる社会民主主義者。あるいはプロレタリアの運動との結合による宗教再生の展望という独自の見解を表明したマルクス主義者三木清。三木を批判しつつも宗教の改革運動は肯定し、プロレタリアと宗教家との一時

的提携を認めた服部之総。この類型は、マルクス主義の立場に立ちつつも、ソ連型マルクス主義の機械的引き写し、「宗教の阿片性」一本やりの「戦無」の思想とはニュアンスを異にする。^②

「マルクス主義と宗教」論争で登場した第二の類型は、宗教の改革、宗教社会運動を主張する宗教家たちである。宗教改革をスローガンとする反宗教運動を展開した浅野研真。新興仏教青年同盟を結成する妹尾義郎。平和運動と社会運動犠牲者救援に宗教家の使命を説いた越智道順。マルクス主義と仏教徒とのあり方をめぐる著作で知られる三浦参玄洞。さらに「社会的基督教」を説いた中島重やSCM(学生キリスト教運動)の流れ。この類型は、既成教団の腐敗と体制化を認める点で左翼戦線と同一地平に立つ宗教家たちである。^③

しかるに、反宗教闘争同盟準備会から日本戦闘的無神論者同盟にいたる流れは、以上の類型のいずれをも否定するところから出発した。おりからソ連では、ミーチンの「哲学のレーニンの段階」の提唱が行なわれ、戦闘的無神論者同盟による反宗教宣伝の急務が説かれていた。日本のプロレタリア反宗教運動も、一九三〇年前後の「マルクス主義と宗教」論争を「レーニンの段階」の無神論闘争をしてやりなおすところからはじまった。^④

(1) 一九三〇年前後のマルクス主義と宗教をめぐる論争のスケッチとして、赤澤史朗「一九三〇年代の反宗教運動」(東京歴史科学研究会編『転換期の歴史学』一九七九年所収)がある。

(2) 高津正道の著作としては『無産階級と宗教』(一九二九年、大鳳閣)、『搾取に耽る人々』(一九三一年、同前、改題『仏教暴露』、一九三一年、自由社)がある。自己の体験をふまえた仏教界、とくに本願寺教団に対する腐敗の暴露と糾弾に力点がおかれている。三木・服部論争の主要文献はそれぞれの全集におさめられている。

(3) この立場の論稿の多くは、その批判者もふくめて宗教紙『中外日報』に載せられた。中外日報東京支局編『マルキシズムと宗教』(一九三〇年、大鳳閣)にはその主要論稿が載せられている。本稿はこの論争について深く立ち入らないので、本書に収められている執筆者を紹介するにとどめる。すなわち長谷川如是閑・三木清・服部之総・三枝博音・小林多喜二・神近市子・大宅壮一・細田源吉らマルクス主義、ないし

それに近い立場からの宗教批判、宇野円空・二木保幾・本荘可宗・倉田百三・三浦参玄洞・早坂二郎ら宗教家、ないし宗教の果す一定の役割を是認する立場からの反論と宗教改革の可能性の論及に大別される。なお三浦参玄洞は別にこのころ『左翼戦線と宗教』（一九三〇年、大鳳閣）『マルキシズムの宗教否定と仏教徒』（一九三〇年、中外出版）の二著があり、神近市子はブラウン『神と資本家』を邦訳している（一九三〇年、大鳳閣）。また中島重も『マルキシズムに対する宗教の立場』（一九三〇年、新生堂）を著している。

(4) ミーチン『哲学論争の総決算と反宗教宣伝』の邦訳がでたのは一九三二年二月のことであるが、ソ連での宗教問題についてはすでに秋田雨雀『ソヴェートロシアに於ける宗教問題』（一九三〇年、鉄塔書院）がでている。マルクス主義の古典的著作のうち宗教関係を抄録したこの期の出版物には次のようなものがある。スバルゴ『マルキシズムと宗教』（渡辺勇助訳、一九二九年、内堀書院）、プレハノフ『マルクス主義宗教論』（川内唯彦訳、鉄塔書院、一九三〇年）、浅野研真編『マルクス主義の宗教批判―マルクス・エンゲルス・レーニン・プレハノフ・ブハーリン論集』（一九三二年、大東出版社）、ソヴェート無神論者協会編『レーニンの反宗教論』（一九三二年、白揚社）、『マルクス主義反宗教理論』（マルクス・エンゲルス、一九三二年、白揚社、全五冊）、ルカチャルスキー『反宗教論教程』（一九三二年、白揚社、全三冊）、ヤロスラフスキー監修『反宗教教程』（一九三二年、京都共生閣）。また共生閣から一九三二年『フォイエールバッハ著作集』が刊行された。第一巻「基督教の本質」、第十二巻「宗教の本質」、第三巻「唯物論と唯心論」、第四巻「ヘーゲル哲学批判」、第五巻「基督教の本質、補遺」となっている。

プロレタリア無神論者インターナショナル

日本におけるプロレタリア反宗教運動は、他のさまざまなプロレタリア運動と同様に、国際的な運動への強いインパクトを受けている。事実、日本戦闘的無神論者同盟は、プロレタリア無神論者インター（IPF）日本支部であることを標榜している。

IPFは⁽¹⁾一九二五年、チェコのチェプリツで創立大会を開いた。同年二月にライプチヒで開催された第二回大会においては、ブルジョア自由主義者に、第二インター系の一部社会民主主義者を加えて構成されていた国際無神論者インターナショナル（本部ブラッセル）の排撃を決議している。しかしこのことは、IPFがコミンテルンに直

結する国際組織であることを証明するものではなく、各国の加盟団体の構成、成り立ちは多様である。六〇万人のメンバーを持ち、すでに四半世紀の歴史をへているドイツの団体は、オーストリア、チェコと並んで、社会民主主義者とその指導部を構成していた。一九二八年一月の第三回大会の時点では、この三国のほか、ソ同盟・デンマーク・ベルギー・フランス・ポーランド・アメリカの団体が加盟している。

この第三回大会のころより、コミンテルンの政策を反映し、各国の団体のうちに共產主義者と社会民主主義者の反目は激化し、第三回大会で議長に選ばれていたハルトウィヒらを「反宗教闘争は超党派的なものであることを主張しながら、その実は社会民主党の政策を持ち込んだ」（川内唯彦「反宗教闘争の現段階的意義」）「反宗教闘争の旗の下に」（二六二ページ）として、共產派は批判した。ハルトウィヒらは、ドイツ、チェコの反対派を除名し、またスイス・フランスの加盟団体を除名処分とすることで応えた。この間、ドイツのシーウェルスらにより、ブラッセルの国際無神論者インターとI P F社民派との合同の話し合いが進められていた。

一九三〇年一月にチェコのボードンバツハで開かれたI P F第四回大会は、オーストリア・ドイツ・ポーランド・ベルギー・チェコの代議員のほか、スイス・フランスなどハルトウィヒに除名された左翼反対派の代表が参加した。ドイツに典型的に表われているように、この大会には左翼反対派のみが出席し、このためドイツの代議員はドイツの団体の決定権を持って大会に出席したことを確認するよう求めて、拒否されていた。

この大会ではハルトウィヒ、シーウェルス、ロンツァル、レーベンハルトらの社民幹部を除名処分に付し、共產派として純化され、国際反宗教組織は二分された。これ以後のI P Fのなかでソ連邦の「戦闘的無神論者同盟」の比重は大きく増大した。一九二五年四月に創立されたこの団体は、一九三〇年において三五〇万人の同盟員を有してい

ると発表されている。

日本における反宗教運動が展開されはじめるころのI.P.F.はこうしてソ連を中心とするコミンテルン影響下の共産主義者が、その指導権を確立していたわけである。⁽²⁾

(1) *Идеи International of Proletarian Freethinkers* の發語は、*Римский* の同意の *Интернационал пролетарских свободомыслищих (ИПС)* と呼称された。Freethinker あるいは Freidenker (ドイツ支部はこの語を機關誌をこじつた) という語から「國際自由思想家同盟」という訳が与えられることとなる。しかし freethinking とは狭義には一八世紀啓蒙時代の理神論 (deism) あるいは汎神論 (pantheism) を指す用語であり、封建的宗教からの自由を説く思想家たちを呼称した。「無神論者」の訳語はやや原意をそこなうが「自由思想家」という日本語は、いささか遠い語感となる。

(2) “Советская историческая энциклопедия” т.6 1965, стр.151 によれば、ИПСは、一九三六年に、ブラッセルを本部とする國際無神論者インター Брюссельский интернационал свободомыслищих と合同して單一の Союз свободомыслищих となり、反ファシズム統一戦線の立場に立った。とある。同じく『ソヴィエト歴史百科』第一三卷（一九七一年）五〇七頁において、Союз свободомыслищих は、一九二六年以前の呼称を Международная федерация свободомыслищих として、一九三六年の ИПС との合同による現呼称を Всемирный союз свободомыслищих、英語表記は World Union of Freethinkers (WUF) として、第二次大戦中の中断のあと、一九五〇年に復活、ロンドンに執行委、ブリュッセルに書記局をおいている。（この項、岩村登志夫氏の御教示による）。ブルジョア的といわれた國際無神論者インターとの合同をもたらしていく点など、人民戦線戦術の採用とともに、大きな転換を行った運動分野といえる。

反宗教闘争同盟準備会の成立

反宗教闘争同盟準備会は、一九三一年三月の数回の予備懇談会ののち、同四月七日に発足した。その事務所は東京都神田区今川小路の江戸ビルにあったプロレタリア科学研究所におかれた。準備委員のメンバーをみると、代表格の

真溪蒼空朗のほかは、秋田雨雀、川内唯彦、秋沢修二、佐野袈裟美、松岡松平ら、そのほとんどがプロ科員で占められている。つまり反宗教闘争同盟は、プロレタリア科学研究所の一分枝として意図せられ、またプロレタリア科学運動の大衆化をめざす組織形態の模索のなかから生みだされてきたと思われる^①。準備会機関誌『反宗教闘争』が発刊される前の一九三一年五月号の『プロレタリア科学』には、準備会員山本彦一の「反宗教運動に就いて」という基調的論文をふくむ「反宗教運動の頁」が特設されてある。この山本論文^④とする、および『反宗教闘争』創刊号（一九三二年六月）巻頭の「運動方針大綱（草案）」^②とするをもとに、あゆみ出された反宗教運動の基本的なとらえ方を整理してみる。

資本主義体制の「第三期」、その没落の過程のなかで、ますます激化する帝国主義間の矛盾、ソ連社会主義の進展と帝国主義諸国の干渉戦争の準備、このなかでの社会民主主義者の裏切り、というステロタイプ化した一般情勢をまず述べたあと、①論文は階級社会、資本主義社会において、階級支配の道具として宗教が使われてきた一般的原则を述べる。

「宗教はイデオロギー一般と同じく、社会的存在によって、根本的には物質的生産関係によって決定されたものであって、近代的宗教は、資本主義的生産関係にこそ、その物質的根拠がある」（①一四二ページ）

資本の圧迫に対して、不安、絶望、孤立無援の民衆が、その幻想的幸福の追及として宗教を見いだすのである。「さればこそ、宗教は抑圧されたる人間の嘆息である。それは、未来の幸福の約束に慰められて、現世の苦痛を隠忍せしめんとするに他ならない」（同前）。

つまり宗教の最大の犯罪的な役割は、その彼岸主義であり、この点で現実社会の変革をめざす階級闘争に敵対し、

その目ざめを妨害するものと位置づけられる。そしてこの点においては、神・仏・基をはじめ他の雑多な新興宗教もふくめて「その多様な外面的区別があるにかかわらず、資本主義社会の中にあつて、果しつゝある社会的役割は同じ」(①)であるとし、それぞれの宗教の性格と機能の相異についての関心はうすい。

さらに「階級闘争の激化と既成教団の無力、反動化」とともに、一部の宗教家による改革運動が起きあがつてきたが、これも十把ひとからげの次のような把え方による一括否定であり、社民の反宗教運動も一括否定の対象に加わる。

「彼等は既成宗教に反対して、新興宗教をかかげて進出を試みようとしている。しかしこれも要するに看板の塗りかえ、進歩的な仮面で当面をゴマかそうとする企図に外ならない。賀川豊彦の『神の国』の運動、妹尾義郎の新興仏教青年同盟、得体の知れぬ『合理的宗教』、自然科学者の宗教擁護運動等々皆それだ。その他の雑多の仏教社会主義、キリスト教社会主義など、資本主義に反対するものである如く見せかけても、結局はファシスト的な役割りを演ずるものでなくて何であらう。尚また社会民主主義者の『反宗教運動』なるものも存在する。彼等は一応マルクス主義的宗教観に立脚するの如く粉装するが、運動をプロレタリアートの真の基本的方向より意識的に外らすことにおいて、従つてまた結局において階級支配の道具たる宗教の存在を永遠ならしめんとする点において、われわれの運動の妨害物である。」(①一四四ページ)

反宗教運動の目的は、宗教的彼岸主義にとらわれている「後れた層」を「一刻も早く宗教並びに文化反動の束縛より切りはなして階級闘争の能動的な分子に転化させることを目的とする」(②四ページ)のであり、さらに文化反動からきりはなすということは「同時にマルクス・レーニン主義社会観の注入を意味する」(同前)こととなる。つまり反宗教闘争は宗教を根絶する闘争であるが、このためには社会主義社会を建設しなければならぬ、つまり資本主義社会を打倒しなければならぬ。「反宗教闘争は階級闘争の一翼とならねばならぬということ、反宗教闘争は政治闘

争に従属されねばならぬということ、これがこの運動にとって第一に考慮されねばならぬ点である」(②五ページ)。
そして準備会規約第二条「目的」は、この見地を次のように明文化した。

「反宗教闘争は階級闘争の一翼であると云ふ見地に立ち、総ての勤労大衆をあらゆる形態の宗教的観念より解放し以てマルクス・レーニン主義的世界観を獲得せしむる為の組織として『反宗教闘争同盟』結成の準備活動を以て目的とす。」⁽²⁾

この見地はまた、社会民主主義者との反宗教運動の基本的な相異点と考えられた。つまり「宗教を私事として取り扱う社会民主主義者と異なり、マルクス・レーニン主義者は宗教をプロレタリアートの×(党)の仕事として取りあげる」(準備会編『反宗教闘争の旗の下に』はしがき)もの、つまり階級闘争の一翼として、プロレタリア党の一般的戦略の線に沿って運動が位置づけられている点が、社会民主主義的反宗教運動との決定的相違とされた。このような政治闘争への従属、という運動の特質は、以降もしばしばみることができる。

反宗教闘争同盟の組織は、広汎な大衆組織とならねばならぬことが強調された。そして「同盟を構成する組織単位は原則として他の種類の大衆組織の内部に設けられなければならない」(②、九ページ)。「労働組合、農民組合、水平社、消費組合、無産婦人団体、進歩的な青年団、プロレタリア・エスペランティスト同盟等とは、きん密なる提携がなされなければならない」(④、一四五ページ)。そしてメンバーは少なくとも無神論の立場に立っていることが条件であるが、同時に唯物史観、マルクス・レーニン主義世界観を身につけるための不断の組織的とりくみが強調されることとなった。

以上にみたように、反宗教闘争同盟準備会は、反宗教闘争を、たんなる宗教の腐敗暴露や、その「民主化」のための闘争ではなく、宗教を絶滅し、プロレタリア的世界観をうちたてる闘争、資本主義を打倒する階級闘争の一翼とし

との闘争、そのための大衆的組織の行う運動として、自らを位置づけたわけである。前年の論争においてみられた、社会運動上における宗教家との一時的提携の可能性を論ずるという姿勢は全くなく、ましてや三木清のような、プロレタリア運動との結合による宗教の再生の展望などを語るのは、もはや「修正主義」以外の何ものでもなかった。

(1) プロレタリア科学研究所常任委員会は一九三一年一月に「プロ科はマルクス主義の研究所であつて政治的指導団体ではない。従つて政治的意見は発表すべきものでない。但しマルクス主義の研究所である限り、単なる研究団体ではなくして飽くまで政治的立場に厳密に立つて研究しなければならない。プロ科の読者は之に止ることなく、正しき政治指導の下に進まねばならない」との声明を出している。プロ科が、研究者の研究団体として行くか、大衆的組織とするかの論争が、このころに行なわれていた。この動きは三二年四月の大衆啓蒙誌『われらの科学』の創刊を経て、三三年一月、「大衆的プロレタリア科学運動を通じて労働者農民並に其の他勤労大衆の政治的経済的要求の為に闘争す」の一句を規約の目的の一項にかかげるプロレタリア科学者同盟に改組されることとなり、大衆的団体への脱皮と非合法化がすすんだ。戦闘的無神論者同盟の結成は、プロレタリア科学研究所のたどるこのような歩みを、先どりしたものとみえる。

(2) 一九三一年九月に正式結成された戦闘的無神論者同盟の規約第二条(目的)は「総ての勤労大衆を凡ゆる形態の宗教的觀念より解放し以てマルクス・レーニン主義世界觀を獲得せしむることを目的とす」となっており、「階級闘争の一翼」との語句は明文化されていない。

準備会期の活動(一九三一年四月～九月)

発足した反宗教闘争同盟準備会が、最初に挙行了した公然の大衆活動は、一九三一年五月二三日、東京上野の自治会館で挙行了した「宗教打倒大演説会」である。場内の聴衆千名、なおあふれた者八百名という盛況裡(『反宗教闘争』創刊号、七三ページ)に挙行された会場の正面には、「工場布教反対」、「宗教的募財寄附拒絶運動を開始せよ」、「反宗教闘争を階級闘争の一翼とせよ」、「帝国主義戦争反対」など、この四月に発表されていた行動綱領案にのっとったスローガンが掲げられた。このうち「マルクス・レーニン主義の普及拡大」、「楠公祭を粉碎しろ」の二つは臨検の警察官の要求により撤去させられ、また会場内にまぎれこんだ右翼との小紛擾もあった。弁士は秋田雨

雀が「反宗教闘争の意義」と題した総論的演説をしたのをはじめ、服部之総・佐野袈裟美・松岡松平・布施辰治・川内唯彦・浅野研真・寺島一夫・河野重弘・佐々木孝丸・藤枝丈夫・秋沢修二らであり、農民闘争社からのメッセージがよせられた。

講演会は、準備会が大衆組織として正規に発足するための組織活動の重要な手段として考えられた。この七月二六・二七日、東京での「戦旗の夕」には佐野と秋沢が弁士に立って反宗教運動を訴え、さらに八日には夏季巡回講演を展開した。八月四日の横浜を皮切りに甲府、長野県（上諏訪、中塩田村、小諸町、五加村、須坂町）、新潟県（三条）、富山県（富山市、高田^{（たかた）}市、伏木町、滑川町）、金沢、京都、大阪、神戸、松阪、名古屋、岐阜、大垣で展開された（「反宗教闘争同盟大会議案」組織部報告）。長野県西塩田村は、折から寺院の地主を相手にした小作争議が展開中であり、全農組合員三〇〇名が参集した。農村の会場として選ばれたところは全農全会の拠点であるところが多い。反宗教闘争同盟は農民の組織化に力を入れ、機関誌『反宗教闘争』には農民のための自然科学講座を連載している。

このことは準備中央の発した檄・指令の第一号が、六月の「全国の革命的貧農諸君に訴える」であったことからもうかがえる。ここでは寺院の地主としての性格が強調され、小作争議において地主に味方をする事例の多いことを説く。また青年団、処女会、在郷軍人会、青年訓練所などにおける「阿片をふりまき『アキラメ』の説法をする」状況を弾劾する。また小作争議にかかわる農民の集会場としての寺院の使用を断わられた事例も、しばしば指摘された。このような事実から、「宗教を農村から追い出すことは、階級闘争の成長にとって絶対必要」であることが強調されるが、ここでも運動の主要な対象は仏教寺院におかれてるように思える。

また夏になると「盂蘭盆に対する闘争について」なる指令を発し「ウラ盆を廃止し、労働者農民の祝祭日、記念日

を普及しろ」「ヤブ入を廃し公休制を」「無産者の盆勘定を棒引に」「盆踊りをデモに転化せよ」の名のもと、習俗行事に対する反対運動を指示した。死者の霊が帰ってくるということの自然科学からみた荒唐無稽さを説き、この行事をもっぱら棚経をあげる坊主の荒かせぎの機会としてのみ促えるところに、習俗的行事に対する硬直した姿勢をみる。この孟蘭盆カンパニアの過程で、全国で一二〇〇人の準備会員を獲得したとされているが、うち労働者四割、農民はわずかに一割（創立大会、組織宣伝部活動報告）にすぎず、農村の組織化はそれほど進んでいない。

反宗教運動はこのあとも、初詣り、節分、初午、灌仏会、彼岸といった宗教的習俗行事を一律に否定し「こうした年中行事は、どうして起るやうになったか、どういふ意義をもっているものであるかを明らかにして、そうした影響から大衆を引きはなし更にそれに対して積極的に反対する方へと大衆を目覚めさせて行く」（戦無機関紙『われらの世界』創刊号、32・3・6、「発刊の言葉」）ことの必要を説き続け、さまざまな喜劇的な運動がなされて行く。

このほか「八・一反戦カンパについての指令」「国際青年デー（九月六日）について」が準備会中央から発せられている。前者は、ソ同盟擁護、帝国主義戦争反対の全プロレタリア的課題に対し、その一翼としての反宗同盟が参加する必要を説き、工場布教、植民地布教に反対し、世界宗教平和会議の反動的役割を暴露し、反ソ十字車を打倒することが、反宗戦線の責務であるとする。また青年デーにあたっては、宗教反動層も活動分子としての青年に注目し、とりわけ青年訓練所、青年団を通じた宗教宣伝を重視する必要を論じる。さらに希望社、修養団、日本魂社、鉄道青年会などの反動教化団体の撲滅を訴え、また「全農の親玉、牧師杉山（元次郎）を追ひ出せ」として、あたかも宗教者を幹部とすることが社民の反動性の証明であるかの主張をしている。

反宗教闘争準備会の出版活動も、以上のような方針をもとにした内容となっている。

機関誌『反宗教闘争』は六月に創刊され、八月の第三号まで刊行（すべて発禁）されたが、第四号は九月二日の検挙で原稿がすべて押収され陽の目をみずに終わった。通俗講座「宗教の起源」、「マルクス＝レーニン主義世界観大要」、「プロレタリア自然科学講座」の連載のほか、「工場から農村から」の欄を常設して、「オレ達のメーデを邪魔した本願寺のクソ坊主をやっつけろ」（全農富山県連杉原鉄蔵）「宗教的伝統根深き長き長崎より」（長崎支部準備会）など、各地の運動の実状を紹介している。さらに「坊主共の蠢動」欄では、神仏基各派宗教界の動きを報じ、またソヴェート戦闘的無神論者同盟大会決議など、外国の組織の資料の訳載がある。総じて運動と社会の動きの実状を報じたものが多く、理論的論文はやや少ない。創刊号では永田広志の「反動批判者は我々を如何に批判したか」くらいである。知識人の宗教論争ではなく、プロレタリアの大衆運動の機関誌として意識的に位置づけたあとが感ぜられる。準備会はまた機関紙『反宗教闘争準備会ニュース』を出し、前述の指令、檄にこたえた各地の活動と、組織建設の実状を中心に報じた。

準備会の理論的立脚点をまとめた『反宗教闘争の旗の下に』は、一九三二年七月八日初版が共生閣より刊行された。B6版三三四ページ。目次は次のとおり。

「農民と宗教」佐野袈裟美、「ソヴェート同盟に於ける反宗教運動について」秋田雨雀、「ソヴェート映画に於ける反宗教闘争」山内光、「本願寺教団の階級性」西田繁、「国家と宗教」松岡松平、「宗門経営の分析」服部之総、「我が国に於ける宗教的建築の変遷とその階級性」遠地輝武、「宗教は如何に支配階級に奉仕するか」深谷進、「自然科学と宗教」林謙吉、「宗教、観念論、唯物論」永田広志、「カトリック教批判」大塩健、「理論的演習より実践的闘争へ」真溪蒼空朗、「転換期に立つ宗教家」原黎雄、「反宗教運動の自由について」布施辰治、「反宗教闘争の現段階的意義」川内唯彦、「反宗教運動について」山本彦一、「宗教の唯物弁証法的把握と反宗教闘争」秋沢修二、「宣言、全世界のプロレタリア無神論者に訴ふ」（一九三〇年一月、プロレタリア

無神論者インターナショナル第四回大会決議

準備会はこのような活動のなかで一九三一年九月に正式結成大会を予定した。しかしながら官憲の弾圧もようやく本格化し、とりわけ、八月の反戦デーにおけるデパートや工場でのビラまきは官憲を刺激し、まず八月一三日の検挙に続き、同月二三日、本部の総検を実行、八月二十九日の朝鮮併合記念日と九月一日の震災記念日のために準備していたビラなどを押収した。このなかで機関誌配布名簿を奪われ、八月二十四日の非公然アジトの急襲とともに、つみあげてきた組織活動にはかなりの打撃となった（『反宗教闘争同盟』号外、31・9・10）。しかしあくまでも、合法的に公然と結成大会を開催する方針でのぞむこととし、大会は九月二〇日午前九時より東京築地小劇場で挙行することに決定された（同前）。

日本戦闘的無神論者同盟創立大会

一九三一年九月二〇日の結成大会の当日、会場の東京築地小劇場には全国からの代議員一五〇名が集まっていた。司会者開会辞、議長・書記・各種委員の選出、友誼団体の祝辞、本部報告、支部報告、議事、中央役員の選出という議事プログラムもすでに発表されていた。しかしまさに開会せんとするとき、所轄警察から集会の解散が命ぜられ、やむなく翌二一日夜上野自治会館で予定通り開かれた結成記念講演会を途中から結成大会にきりかえ、再度の解散命令をうけた。この間に非公然の会合をふくめて事実上の結成大会を実現したとしている。

この創立大会に代議員を送りえた支部は、東京・大阪・京都・神戸・長野・山梨・新潟・福島、八府県であった（『プロレタリア文化』）一九三三年四月号、二五ページ）。大会議案のうち組織宣伝部活動報告によれば同盟準備

会員は全国で二八〇〇人（実質三〇〇〇人）とされた。九月初旬に結成された東京府連（中部・城北・城西・城南・江東の五支部）のほか、仙台・平・甲府・上諏訪・上小・小諸・須坂・中信・南蒲原・富山・京都・大阪・神戸・奈良・松阪・岐阜・名古屋・岡山・石西（島根県）・長崎・宮崎に支部組織が確立された、としている。

大会はいつその組織の大衆化の必要を強調し、このために一般の啓蒙に中心をおいた低廉な雑誌、もしくは新聞の発行の必要が述べられた。この方針は翌一九三二年三月六日付で創刊された機関紙『われらの世界』となって陽の目をみ、一九三四年五月三〇日付第二九号まで刊行された（同志社大学人文科学研究所には第一・二・一〇号を所蔵）。また『反宗教闘争』をひきつぐ、より高度な理論的問題をあつかう機関誌『戦闘的無神論者』は一九三一年一月から三三年一〇月にかけて一二冊が発行され（未見）、『無神論の理論と実践―プロレタリア無神論者インターナショナル世界大会議事録』（一九三二年刊、八〇銭）などパンフ、リーフも若干が発行されることになる。

大会は組織の名称として「日本戦闘的無神論者同盟」を採択した、本部の説明は次のようにいう。

「反宗教同盟なる名称では、われわれの運動の消極的な方面しか表現されない。しかしこの運動には、戦闘的無神論という一つの体系ある世界観を一般大衆の間に宣伝する積極的なきはめて重要な任務がある。この積極的な方面が端的に名称の中に表現される方がよい。」

また「戦闘的無神論」とはレーニンの使った用語であり、ロシアやモンゴルでの組織名とされていること、さらに「現在、日本にある社会民主主義者の似而非反宗教グループ（高津正道らの日本反宗教同盟をさす―後述）と明確に区別」するためにこの名称を提案した、としている。

大会報告はこのほか文化のあらゆる領域にわたっての専門家集団としての恒常的講師団の設置、反宗スポーツ団、

専属劇団、反宗通信員の設立、反宗教宣伝員の養成、反宗教展覧会の開催、「募財、寄附拒絶、サイ銭不納同盟」設立について訴え、採択された。

また同盟は「ソヴェート友の会」を友誼団体として支持することを特に議決するとともに、設立の準備がすめられていたプロレタリア文化連盟（コップ）に対する態度決定の件を大会に上呈した。コップ創設のための準備会は八月よりすでもたれ、反宗準備会としてすでに出席してコップに参加する各団体代表者数の割りあてもすでになされていた。大会は、ファシズムと文化反動に対する共同の闘争の推進という観点からコップに参加することを議決し、一九三一年一月のコップ結成とともに、その構成団体のひとつとなった。

創立大会から四カ月たった一九三二年一月二五日付で発行された報告書の表題には『IPFプロレタリア無神論者インターナショナル』日本支部 日本戦闘的無神論者同盟 運動方針 綱領・規約とある。しかしIPFに支部として加盟することとは大会議案のどこにも記述がない。結成大会は当初は公然の合法集会として予定されていたので、そのための配慮があったのかもしれないが、加盟の議決、加入手続などは判然としていない。^①

運動方針大綱、行動綱領、規約は、五月の準備会時点で公表したものをほぼ踏襲している。行動綱領四二項目は、四月時点ではすべて並列されていたものを、経済・教育・社会・政治及び国際の四つに分けている。

「経済」の項では、宗教的募財の拒否、社寺所有地の解放とならび「社寺、教会、説教所を労働者農民の集會に無償にて利用するの自由」の一項が、もっとも具体的現実を反映したものであろう。

「教育」においては、学校における非科学的的神話教育、参拝強要に反対するとともに、「一切の宗教学校の廃止」というあらっぱい主張がふくまれる。学生宗教団体を廃止するという条項は、のちSCMの自己否定につらなるもの

である。

「社会」においては、工場、軍隊、青年団などにおける宗教布教に反対し、あらゆる教化団体の撲滅が語られる。

また迷信、宗教的風習や祭礼、葬儀、宗教的年中行事を廃止し、これに對置して「労働者農民葬、赤色結婚、労働記念日（メーデー、三・一五、四・一六、八・一デー、十月革命記念日等々）の挙行普及」があげられた。また社会的基督教、新興仏教を「最新のブルジョア的宗教運動」と呼び、「社会民主主義的似而非宗教運動」と同じ項にならべてその打倒を呼びかける。最後に神社局・宗教局の廃止と神社に対する国家の特別待遇反対があげられている。

「政治及國際」においては、治安維持法による反宗教活動への弾圧反対、植民地布教反対、マルクスレーニン主義世界觀の普及拡大等のあと「ソヴェート同盟の擁護」「帝國主義戦争反対」の二項で結ばれるが、この二項についてはとくに「他団体のそれと機械的に同一視してはならぬ。戦無独自の内容を有することを記憶せねばならぬ」との附記がある。

また規約においては、同盟員の資格を一六歳以上の「無神論の立場に立」って「反宗教闘争に積極的に参加せんとする者」とした。最低三名からなる班を基礎組織とし、支部、地区委員会、府県連合会、中央執行委員会、中央常任委員会の組織系列が明記されているが、基礎組織がいかなる社会的単位でもって編成されるかの明文はない。また中央常任委員会は左の八部がおかれることになった（カッコ内は官憲資料による創立大会直後の責任者、『プロレタリア文化運動の研究』司法研究、第二八輯九、三二八ページ）。

組織部（岡田文吉）、宣伝部・財政部（板倉甚）、調査部・國際部（石川湧）、教育部（永田広志）、統制部（松岡松平）、機関紙部（磯野駿）

中央委員長は暫定として川内唯彦が選ばれた。

(1) たとえばモツブルの場合でいえば、当初は社会民主主義者をふくめた大衆組織として出発し、一九三〇年の第二回大会で国際組織モツブルに加入する議決を行って「国際赤色救援会日本支部 日本赤色救援会」と名乗ることとなる。IPFの場合は、当初からコミンテルンと直結した国際組織という状況ではなかったことが、各国の加盟組織の性格を多様にしているが、日本の場合、IPFがほぼ共産派でうちかたまれに以降に、日本の組織ができあがった経緯から、共産派国際組織としてのIPFの加盟を自明の前提としてとらえたようである。全協とプロフィンテルン、新教・教労とエドキンテルン、共青と青年共産主義インターなど、左派大衆団体の国際組織との関係は十分に解明されているとはいいたい。

高津正道らの全日本反宗教同盟

戦闘的無神論者同盟の創立大会報告において「社会民主主義者の似而非反宗教運動」とされている全日本反宗教同盟も同じころに結成された(一九三一年六月、準備会規約案と宣言発表、同年一月結成大会)。

この流れのリーダーは高津正道である。広島県の真宗本願寺派南光寺の住職の長男として生まれた高津は、一八歳のとき父のあとを継ぐべく京都に学び、二一歳で南光寺住職となったが、京都時代にはぐくまれた仏教改革の関心は郷里の壇家との関係に風波を立たせることになる。このため一九一八年、二五歳のとき、郷里を出て上京、早稲田大学文学部哲学科に入学した。早大時代において、北風会、民人同盟会、暁民会の活動に参加し、第一次共産党に加わったことはよく知られている。一九二三年の第一次共産党事件の直前にソ連に亡命し、翌年に帰国するが、福本イズムに反対し共産党を離れ、中国無産党を経て全国大衆党、全国労農大衆党に参加した。この間、自らの出自に即した仏教界の腐敗を糾弾する著書『無産階級と宗教』(一九二九年)、『搾取に耽る人々』(一九三一年)をあいっいで出版した。後者は『仏教暴露』と改題されて出版されていることからもうかがえるように、既成仏教、とにわけ本願

寺の腐敗ぶりに筆誅を加えた。

一九三一年三月の反宗教闘争同盟準備会の最初の会合には、無産階級の立場からの反宗教運動の必要を説いている有力な論客として高津も出席したが、「社民排撃」を主張する準備会とはあいいれず、別に独自の反宗教組織の創設にのりだした。そして六月には「本会は無産階級運動の一翼として、反宗教闘争を行ふ機関たる『日本反宗教同盟』結成の準備活動することを以て目的とす」との、日本反宗教同盟準備会を結成、その機関紙『反宗教』も、一九三一年一〇月一日付で創刊号がだされた。

日本反宗教同盟と日本戦闘的無神論者同盟が、その反宗教運動の内容において、それほどの大きな主張の相異があったとは思われない。『反宗教』創刊号一面にゴチで印刷されたスローガンめいた語句は次のようなものである。

「宗教は支配階級の特権維持の精神的用具である。」「宗教は労働大衆の解放の進路を晦ます毒瓦斯である。」「あらゆる形態の宗教打倒。」「宗教的募財、寄附の徹底的拒絶。」「加持、祈禱、及び一切の宗教的医療反対。」「宗教的修養団、教化団体の撲滅。」「工場布教及工場内の一切の宗教的行事反対。」「反宗教葬の挙行。」

同じ創刊号巻頭にある高津正道の総括的論文「反宗教運動の任務」においても、宗教の絶滅こそが我々の目的であり「時として宗教家の腐敗墮落を指摘攻撃するが、それは宗教を廓清するためでなくて、彼等の偽善と欺瞞とを民衆の前に曝してその言説の影響力を殺がんとする手段に多ならない」として、宗教改革の立場とは明確な一線をひいている。とはいっても、高津のパーソナリティを反映してか、反宗教同盟は既成宗教の腐敗攻撃にその力点があることは事実で、三一年六月の反宗教同盟準備会宣言も、まず「怪教続出、既成宗教の腐敗ぶり」との小見出しから始まっており、豊富な実例をひきあいに出しての既成宗教、とりわけ仏教に対する攻撃をなすことは、このグループの得意

な部門といえる。

戦闘的無神論者同盟との大きな相違は、その運動上の位置づけにあらう。マルクスレーニン主義世界観の獲得、ソ同盟擁護、帝国主義戦争反対、階級闘争の一翼としての反宗教運動、という位置づけを自らになした戦無は、その政治闘争の優位性のテーゼゆえに、プロレタリア運動のなかでの反宗教運動の独自の位置を見失ったかにみえる。その最大限綱領主義とセクト主義は、この時期の共産主義運動共通のものとして戦無にひきつがれた。

これに対して日本反宗教同盟はまだ柔軟な対応をしたことがうかがえる。『反宗教』創刊号に載った文章のなかからひろってみよう。

「自ら無産運動をやっているが熱心な法華信者であったり、大本教や天理教である人がある。これは社会の一面を観て反面を見ない人々である。それだからと言って彼等の信仰を頭から罵倒し非難する者は非マルキストであり運動の破壊者である。何故なら、それによって折角吾々の陣営内に働いている同志を失ふばかりでなく、彼等をしてむしろ反動の陣へ投ぜしめる結果を生ずるのだ。」（泉嘉夫「反宗教闘争とプロレタリアート」）

「他の階級運動の分野に於て凡ゆる反資本主義的要素を糾合して、戦線の統一拡大強化を目指して行く事が、目下の日本の情勢である如く、反宗教に於ても先づこの目標が立てられなくてはならないのだ。そのためにはわれわれを排撃する反宗教闘争同盟との共同闘争も決して回避しない。」（山本和子「反宗教運動への一批判」）

泉の文章は、宗教家をもふくんでいる合法無産政党の現状への配慮であると同じに、たとえば「全農の親玉、牧師杉山を追ひ出せ」といったスローガンをかかげる反宗教闘争同盟＝戦無に対するアンチテーゼである。その戦無に対しても、たんなる宗教腐敗糾弾という、宗教改革路線を一步進めた宗教否定路線としての反宗教運動の一翼として、可能などころでは共同の闘争を呼びかけようとする柔軟さを全日本反宗教同盟はもちあわせていたのである。

全日本反宗教同盟のその後についてははっきりしない。かなり早い時点で無活動状態となり自然消滅した模様である。

第二回大会（一九三三年一月）にいたる活動

発足した日本戦闘的無神論者同盟は、一九三一年一月、発足したコップに加盟し、機関級『われらの世界』創刊準備と組織の拡大強化にのりだした。この間、三一年一月一五日のロシア革命記念ピクニックで、秋沢修二ら二二名の検挙などの弾圧も加えられた。

佐渡における賽銭不納会の組織、東京京橋における月掛拒否闘争は、他の文化運動に比してより多く経済闘争に結びつけられる反宗教運動の特質を発揮したものとされた。また東京江東では反宗教劇団の組織、大阪での反宗パンフの発行などアジプロ活動の成果とたたえられた（戦無中央常任委員会「『戦無』第二回大会の成果と自己批判」、『プロレタリア文化』一九三三年四月号）。

一九三二年中の活動としては二月の建国祭反対運動、四月から六月にかけての宗教的反動教化団体撲滅カンパニア、花まつり、盂蘭盆反対闘争などがあげられる。しかしながらその実態は「二、三のビラや檄文に激越な文句を書き列ねて、これで事終れりとする小児病的セクト主義」であり、教化団体など「敵の大衆組織は、多部からの働きかけに対しては、機械的に反撥するに止まるであろう」（前掲『プロレタリア文化』三三年四月号、二八ページ）と自己批判せねばならなかった。反動的大衆組織の内部に強固な足場を作り、内外呼応した運動の必要性は説かれたが、実際には殆んど失敗に終わっている。

決して左翼的とはいえない一般の大衆団体に対して影響を広げるには、あまりにも戦無の姿勢は硬直したものであった。「マルクス・レーニン主義世界観の獲得」をその目的とした戦無は、極めてストレートにこの「思想の注入」の実践を行った。『われらの世界』の身上相談欄や短編小説に、戯画的な反宗教宣伝の事例のいくつかをみる事ができる。たとえば、信心深い両親を持つ女性が、結婚相手の不信仰を理由に結婚に反対されていることについての身上相談の答は「あなたの御心配は簡単に解決のつくことです」とあっさり冒頭にかかげ、要するに父母の「非常に間違った考え」を説得すること、その説得の内容たるや全く形どりの宗教『阿片論を一步もでないものとなっている（『われらの世界』創刊号）。こうした事例について「簡単に解決」できると考える感覚、プロレタリアは圧迫されているが故に容易に宗教の虚蒙に目を覚す、というあまりにも楽観的な感覚は、多くの民衆の意識とは全くすれちがったものとなるであろう。同じ『われらの世界』の短編小説「真吉とその母」でも、息子の病気を心配した老母が、その病床の隣室で信者仲間を集めて快癒を祈る題目を唱えたことが、むしろ病状を悪化させ、息子の死につながったことを嘲笑的に記している。そしてこの小説の結末は息子の死に落胆した母が、かけ軸や拍子木など抹香臭いものを焼き払うことで終っている。この母親の悲哀を反宗教的現象として記すことができるということが、宗教を求める多くの民衆の意識に対する感性の稀薄さを示す例証とさえいえるであろう。

このような路線から出現する宗教的習俗行事反対の運動が、いかに喜劇的展開を辿ったかは容易に想像できよう。わずかにまともなとりくみとなったのは全国水平社を中心とする無宗教葬儀の運動である。戦無は、この時期におこった水平社解消方針に組織として賛意を表した。この方針について前掲の戦無中央常任委員会の文書は「部落民の大部分が本願寺の搾取の主要な対象とされており、しかも宗教が不当きわまる封建的差別観念の保護色、扮飾物となっ

ている事実を考慮するときは無神論運動の具体的な拡大強化の一つの現れである」（『プロレタリア文化』三三年四月、二六ページ）としている。解消論支持と反宗教運動との関連は文意がとりにくい。しかしながら、水平社が本願寺に對する闘争の一環として葬儀に坊主を呼ばない運動を一部で展開したことは事実である。しかし、この運動は部落民のなかからも反発が強く、ごく短期間で終息し、とりくみも部分的であった。多くの水平運動活動家の回想記のなかにも、無宗教葬儀運動に對する言及は少ない。

宗教の阿片性を認識させる思想注入運動が一定の「成功」をおさめた数少ない事例は、学生キリスト教運動（SCM）の戦無への合流である。「吾々の無神論運動の影響の下に、キリスト教の一角が破壊されたことは、最も特徴的な事件である。……これは日本キリスト教の歴史にとっては画期的な事件である。従来、キリスト教徒が、個人的に無神論の陣営へ走ってきた実例は少くない。しかし、一団のキリスト教徒が、吾々の無神論運動の影響の下に、組織的に反対者の側に移行してきたことは、日本では空前である」（『プロレタリア文化』三三年四月、二六ページ）とその成果を誇った。しかしながら、このように礼賛した戦無常任委員会論文は、つづけて次のような自己批判を述べねばならなかった（同前、二八ページ）。

「昨年（注、一九三二年）、キリスト教団体の一部がわが『戦無』の陣営へ移行してきたとき、これは当然に強力な大衆的反対派活動へ展開さるべき運動であった。しかるに中央部は、これに對して正しい指導をなし得なかった。吾々の陣営へ移行してきた進歩的學生は、キリスト教打倒運動をマルクス・レーニン主義の立場より展開する具体的な方針も戦術も知らなかった。彼らは無神論運動とは、宗教のアヘン性を『理論的』に認識することだと考へる傾向を多分にもっていた。理論的に宗教を克服しなければ、反宗教運動の実践はできない——これが彼等の態度であった。ここには実践の優位の承認の上に立った理論と実践の弁証法的統一はなく、両者の機械的分離がある。進歩的キリスト教徒の反対派活動は、キリスト教会内のダラ幹を文書や言葉の上で攻撃し、

夏季学校をブッコワシ、無神論的優越をアジ・プロしたにすぎなかった。そしてこれらのキリスト教徒は、キリスト教の陣営から勇敢に、アッサリと脱出してしまった。」(傍点、原文)

この論文はさらに続けて、反宗教運動は制度としての宗教の破壊に進まねばならぬこと、それは単なる理論闘争によつては果されないこと、反動的な団体の内部に踏みとどまって反対派活動を展開することを潔ぎよしとしないものは、とりもなおさず左翼日和見主義であることを説く。

SCMは、マルクス主義や無神論の攻勢から教会の学生青年をまもる精神運動として出発し、一九三一年の日本基督教青年会同盟夏季学校において、母体のYMCAから独立した。^① SCM、とくにその関西派は、当初は中島重の「社会的基督教」思想の影響のもとに出発した。中島は「マルキシズムに対する宗教家の立場からの批判は先づ宗教の立場それ自身の自己反省から始らねばならぬ」(中島重『マルキシズムに対する宗教の立場』一四九ページ、一九三〇年)との前提に立ち、キリスト教の贖罪愛による社会化の実現と、このための新たな神の国の哲学を求めた。しかし、従来のキリスト教理解を個人主義的と批判した中島は、階級闘争を権力関係、利用関係の範疇に属するものとして排し、社会全体の共同体的連帯による「神の国」の実現を説いた。そのことはまたSCMの運動も政治運動としてではなく、宗教運動として展開しなければならないという原則を示したものであった。

SCMのとくに関西派は、階級闘争、すなわち政治闘争をもって、従来の社会的キリスト教の限界の克服をとらえ、三二年三月には、帝国主義戦争反対、解放運動への参加という新たな行動綱領を採ることとなった。つまり戦闘的無神論に接近し、宗教運動としてはその自己否定を行うこととなった。SCMは三二年七月のYMCA夏季学校を機に、YMCA復帰派と、反キリスト教派Ⅱ戦無合流派に分解した。そのことは、結果的にはキリスト教改革運動の

芽をつぶすことになった。

戦無の運動が波及したもうひとつの事例は妹尾義郎の新興仏教青年同盟である。この運動自体が、プロレタリア反宗教運動を強く意識して一九三一年に結成されたものである。妹尾は仏教本来の思想が、人間に対する最高の存在は人間であり、宇宙万有は神の創造ではなく、相依相関して不断に流転推移するあるがままの現象としての存在であると、一種の仏教＝無神論、無靈魂論を主張した。またあらゆる宗祖は精神的のみならず物質的にも民衆を解放する社会革命家であつたとし、ここから仏教思想の現世主義、資本主義の改造、国際主義への発展の必然性を説いた。

新興仏教の機関誌『新興仏教』一九三二年一月号には、この立場からの妹尾の「仏教運動の指導原理と運動方針私案」が発表されている。①仏陀の名による仏教統一、②御用化された国家主義的仏教の清算、③国際主義、④個人的観念的福音主義から社会的解放運動へ、⑤階級闘争への参加、⑥既成教団に失われた戒律の現代実践、の六項をかかげ、さらに革命への実践にあたつては、現段階では既成の無産大衆組織を積極的に支持し、これに仏教的浄化を加える、という方向をとつた。

この妹尾らの方針はプロレタリア反宗教運動とのかかわりでいえば、論理的には微妙な関係にある。つまり妹尾の論理には、仏教否定と仏教合理化という二つの契機が内包されていた。前者を原理論の次元として脇におき、後者をつつみこんで共同行動をおこすほどの余裕と寛容と理論を当時の反宗教運動の側が有していなかったことも自明である。妹尾らの運動は一種の片思いに終り、しばらくは細々とした流れにしかすぎなかった。妹尾らがプロレタリアの社会運動の場面で注目されるのは、プロレタリア反宗教運動が一時のうたかたとして消え去り、共産主義運動が壊滅し、人民戦線の必要が叫ばれる一九三〇年代の後半の、労農無産協議会や『労働雑誌』に加わる時代以降のことにな

る。

大衆組織をめざした戰鬪的無神論者同盟の組織形成に目を転ずる。創立大会において、代議員を送った支部・班は前述のように東京のほか、大阪・京都・神戸・長野・新潟・福島であった。しかし創立大会への弾圧、さらに全農全会に対する弾圧により、長野・富山・岐阜といった全農青年部を主体にした戦無の組織は破壊された。一九三三年一月の第二回大会において代議員を送りえた支部は広島・大阪・京都・名古屋・横浜・東京にすぎない。このほか仙台北の代議員は出発間際に官憲に拘置され、佐渡からは風浪のため途中で引き返し出席できなかったという。また代議員は送りえなかったが、創立大会以降に無神論運動の地方的中心となっているところは、熊本・山口・青森・旭川・宇都宮とされている（『プロレタリア文化』一九三三年四月号、二五ページ）。つまり第二回大会時点での組織単位のある府県は十数府県にすぎなかった。さらに朝鮮や台湾などの植民地にも組織はなく、このことは「戦無の大きな欠陥」（同前、二七ページ）とされた。

大衆組織としての組織重点は工場とともに農村におかれていた。とりわけ三二テーゼが発表されると、戦無はこれを忠実にひきうつし、プロレタリア革命に転化すべきブルジョア民主主義革命の重要な戦略的見地としての農業革命の重要性を説き、封建的宗教の影響下にある農村における無神論運動の意義を説いてきた。そして「初期の時代には、吾々の運動は、全会との連繋の下に、特に全会の青年部を中心として、新潟・富山・山梨・岡山・岐阜にかなり強固な基礎をもっていた。ところが、いまやこれらの足場は、殆んど無活動の状態である」（『プロレタリア文化』三年四月、二九ページ）という状態であった。

一九三三年初頭の第二回大会の時点で、中央にあがってきた調査表は、合計二六班、正式メンバー一二六名、その

うちわけは労働者五五名、農民九名、失業者八名、学生九名、街頭分子二二名、その他二三名となっている。⁽²⁾二六の班のうち純粹の農村はひとつもなく、農民は「田舎の小都会附近の農民」、唯一の農村部の班である青森県のそれは半農半漁村の班である。学生の少ないことも、一連のプロレタリア文化運動では類例がない。「日本においては無神論運動は、最も後れた封建イデオロギーに対する運動」であり、それゆえ「極めて見栄えのしない地味な運動」であり、かつ進歩的な学生の多くは宗教に対して無関心であることが、その理由とされた(同前、三〇ページ)。「その他」というのも小市民や準街頭分子とみてよく、これを加えれば四五名と四割近くが街頭分子ということになる。労働者もほとんど大企業に基礎はない。大阪ではデパートなど「大企業」にも組織は若干はあったと発表されているが、東京ではほとんどが小手工業者や小経営の労働者である。「宗教団体や教化団体が喰ひこんでいる重要産業、軍需品工場、国鉄、紡績工場には、ただの一つの足場もない」(同前)という状況であった。

(1) SCMについてはさしあたり次の二文献をあげておく。武邦保「『学生キリスト教運動(SCM)』の思想と行動」(『キリスト教社会問題研究』第二六号、一九七七)、土肥昭夫「日本プロテスタント・キリスト教史」(一九八〇年、新教出版社)のうち、第二章「学生キリスト教運動と社会的基督教」

	1932末	1933末
東京	50	25
京都	13	7
大阪	—	22
神奈川	(70) 5	(30) 18
名古屋	23	—
小諸	(20) 15	—
岐阜	15	—
奈良	5	—
広島	—	(5) 5
福岡	—	(6) 6
計	(90) 126	(41) 77

() 内数字はサークル人員数
『社会運動の状況』より作成

(2) 内務省警保局『社会運動の状況』(一九三二年)五六八ページ、およびこれを転載したと思われる司法省調査部『司法研究』(二八輯九)「プロレタリア文化運動の研究」三三三ページには、故意にか偶然にか、一九三二年末の戦無同盟員数の全国集計を二六名として、「プロレタリア文化」一九三三年四月号の戦無中央常任委員会論文と同じ数値となつている。ただしその算出基礎は異なり、官憲文書は、判明した支部構成員数の合計となつている。『社会運動の状況』には、各支部別の構成員数として上の数値があがっている。また『戦闘

的無神論者』は千部、『われらの世界』は三千部が印刷されたとある。

三二テーゼと第二回大会

日本戦闘的無神論者同盟第二回大会は一九三三年一月に開催された。この大会では綱領と規約が大はばに改定された。創立大会で採択された行動綱領は四二項目にわたる多岐なものであったが、第二回大会で採択された綱領は一四項と、大はばに整理・簡素化が行なわれている。

新綱領の顕著な特色は国家神道に対する戦略的攻撃目標としての重視ということである。その冒頭の第一・二項、および第八・九項は「国家と宗教、宗教と教育の完全なる分離」「神社その他あらゆる宗教組織に対する国家的補助の即時廃止」「建国神話にもとづく国体観念、排外主義、偏狭愛国主義の打倒」「神社への強制参拝反対、絶対主義の宗教的支柱の中軸としての神道の打倒」と、もっぱら国家神道に対する項目となっている。第三項から第七項までは社寺・教会・教化団体や宗教一般に対し、募財拒否・所有地開放などの規定があるし、第一〇項から第十四項までは反ファッショ、帝国主義戦争反対、ソ連邦擁護、マルクス・レーニン主義世界観の普及拡大、といった一般規定である。

「一九三三年度に於ける運動方針大綱」が日本戦闘的無神者論同盟の署名で『プロレタリア文化』一九三三年五月号に掲載されている。その末尾の「当面、最も緊急につきの諸任務を果すべき」とされた一一項のうち、冒頭の二項は次のような表現となっている（同、九六ページ）。

「××（天皇）制の主要な支柱としての神道の反動性の徹底的暴露。××制の宗教的神秘性の暴露。このことは、日本歴史の唯物

史観的研究と相俟って、行はねばならぬ。」

「建國神話に基づく、国体觀念、排外主義、国粹主義の打倒のための大衆的アジ・プロ活動を展開すること。」

一九三一年春の反宗教闘争同盟準備会の出発にあたっては、その反宗教闘争の主要な矛先は仏教、とりわけ本願寺にあったことをみてきた（『反宗教闘争』創刊号の表紙は、軍服姿の軍人と袈裟を着た坊主が何やら談合している図柄となっていた）。

これはあきらかにコミンテルンが一九三二年に発表した「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」、いわゆる三二テーゼの影響のもとに、天皇制の精神的支柱としての国家神道に対する闘争の強化に転換したものである。¹⁾ 天皇制が金融資本のための便宜上の政治形態でなく、それ自体、一定の独自性をもって日本を支配し、金融資本と封建遺制の融合による支配としてあることを述べた三二テーゼは、未完成のブルジョア革命をプロレタリアートの手で完遂し、これを社会主義革命に転化させる課題を提起した。反宗教闘争も、地主・資本家の上に立つ天皇制の打倒に主要な戦略目標をかかげ、その精神的支柱としての国家神道を重視することとなったのである。

平井幸吉「絶対主義の宗教的支柱に対する闘争について」（『プロレタリア文化』一九三三年二月号）は、この新戦略の解説として書かれている。平井はブルジョア革命においては、封建的宗教に対する進歩的、ブルジョアの反宗教の闘争が展開され、政教分離がすすめられたこと、日本の明治維新においては、徳川幕府の体制下における仏教の体制的役割にかんがみて、仏教駆逐の闘争が行われたことから、明治維新がブルジョアの要素を帯びていたことを認めつつ、次のように述べる。

「明治維新の革命において注目すべきは、国教としての神道の樹立である。維新革命はブルジョア革命として極めて不充分的なもの

であったが、それが宗教の領域において果した仕事も極めて不徹底なものであった。一方、外来のイデオロギーとしての仏教を排斥しながら、宗教一般に対する闘争は少しも遂行されなかった。尤もヨーロッパにおいてもフランス革命のみが、宗教の扮装を借りない反宗教闘争を実行し得たことを思へば、右の事情は決して偶然的なものではない。」

慶応四年一月（一八六八年二月）設置の七科には神祇の一科が加えられ、古めかしい「祭政一致」を採用して、政教分離というブルジョア革命の一定式は否定された。一八七二年に神祇省と宣教使が廃止されたのちも、教部省と教導職がおかれ、さらに内務省設置以後も、杜寺局、さらにこれから分離独立した神社局のもとに、神道の事実上の国教化がすすめられた。平井はこのような歴史的事実を列挙して、日本におけるブルジョア民主主義革命の未達成の宗教上の顕著な現象として国家神道の問題に焦点をあてた。

さらに平井は、近来において生起したキリスト教学校における神社不参拝問題に言及し、このような国家への神社参拝強要こそ、神社神道が国家の政治機構と直接結びついた宗教であることを証明するものとした。同時に、このような参拝強要に対してキリスト教徒や、諸神の礼拝を拒否する仏教徒の一部が抵抗し得ないことも当然とする。

「キリスト教界の『名士』山室軍平のごときは、ひたすらに政府との妥協案を唱導し、反動的牧師の首領海老名弾正をしてその友人『斎藤首相』へ哀訴歎願せしめることを提案している。明治年間を通じて日本資本主義の発展の軌道に沿ひ、とにかく他の宗教に比して進歩的なイデオロギーの役割を果たしてきたキリスト教が、特に帝国主義の段階において、反動的退歩的となるのは歴史の必然である。従ってまた支配階級の側よりの『宗教迫害』に対して、キリスト教徒がブルジョア民主主義的要求をかざして戦ひ得ないことも当然である。彼らの為すべき唯一のことは、妥協であり、階級支配への奉仕である。」（『プロレタリア文化』一九三三年二月、一一ページ）

一九三二年一〇月、東京天主教会アレキシシヤンボン大司教が、カトリック関係の諸学校に通告を発し、カ

トリックの学生生徒の神社参拝を容認したことをもって、平井はキリスト教界の妥協の例証とし、かつての内村鑑三事件ほどの反抗をも示しえない「偽瞞と怯懦にみち」たものとした。こうしてブルジョア民主主義的要求である「信仰の自由」という問題さえ、現段階においては革命的プロレタリアートの担ふべき課題とされ、この結論をレーニンの論文「宗教に対する労働者党の態度について」（第四版全集第一五卷所収）「社会主義と宗教」（同第一〇卷所収）を援用して正当化している。

だが、このように「信教の自由」もプロレタリアートの担うべきブルジョア民主主義的課題であり、その達成に努力しなければならぬとすれば、他方で展開されている反宗教闘争との論理的關係をもう少し説明する必要があるであろう。つまり、究極においては宗教の絶滅をめざしつつも、国家神道以外の諸教派とは、参拝強要反対とか、荒唐無稽な建国神話への批判とかといった、ある点での統一の課題を見出し、共同行動がとりうるかどうかという点である。

戦無は「建国神話」の非科学性を暴露する闘いを、天皇制のイデオロギーの支柱をほりくずす闘いとして重視した。もしそうであれば、大本教や天理教の一派をはじめ、やがて治安維持法による宗教弾圧をうけることとなる一連の宗教団体は、すでにこの時期には、論理的にこの点に肉迫していたがゆえに、一定の共通の接点はいりえた。にもかかわらずあらゆる宗教団体の全否定という態度に変化はない。キリスト教界の「妥協と怯懦」を糾弾した戦無は、大本教に対しても「片手に出口なほの『お筆先』をかかげ、片手に殺人剣をもって、満蒙の勤労大衆に直接臨んでい

る大本教は、参謀本部の直接の手先であり、この教団の教徒は武装『屯田僧』である」（一九三三年度運動方針大綱）、「『プロレタリア文化』三三年五月、九一ページ」としているのである。

三二テーゼにもとづく国家神道に対する対決という問題も、十分にその対決の契機を把握したとはいいがたい。無教義宗教という国家神道の特質は、国家神道の否定と、政治革命の完遂とを、ストレートに結びつけることをいっそう容易にした。つまり政治闘争の課題Ⅱ日本共産党の路線にもとづく革命の完遂の途のみを、国家神道と天皇制に対決しうるものという短絡した路線を導くことになった。もともと戦無の方針が日本共産党のテーゼをストレートに反映したものであることはすでにみたとおりである。「最も反動的な半封建的宗教」である神道に対し、より「ブルジョア化」された宗教としてのキリスト教や真宗があり、とりわけ後者に攻撃の主目標をおいた創立期の方針は、明治維新ブルジョア革命説をとった三一テーゼ草案の反映であり、ここから神道を重視する方針に転換した第二回大会の方針は三二テーゼの反映であった。

このような方針上での、共産党の革命路線との一体化は、戦無の組織路線にも反映した。マルクスレーニン主義の世界観獲得の闘争も「大衆の日常闘争に結びつけられた反宗闘争」でないかぎり、少数グループの「極左的セクト主義」（『プロレタリア文化』三三年四月号、三五ページ）となるのは当然である。戦無は日本共産党と完全に一体化し、事実上の非合法を強いられ、大衆組織としての独自の存在理由を失っていったのである。

(1) 三二テーゼは、一九三二年六月二八日付で日本共産党中央委員会発行のプリント版、さらに『赤旗』特別号（七月一〇日付）、および『インターナショナル』九月号の改訂版として、この年の中に邦訳され流布している。

(2) 一九三三年秋の、カトリック学校における参拝強要と、これに対する若干の抵抗と妥協の問題については、上智大学の例をあげて考察した和田洋一『日本・カトリック一三〇年代前半の苦悩』（『キリスト教社会問題研究』第二五号、一九七六年）がある。同志社でもこの三年後にかの神棚事件がおこることになる（『同志社百年史』通史編二、一九七九年）。

おわりに

一九三三年以降の日本戦闘的無神論者同盟の動きは目立ったものが少ない。機関紙『われらの世界』は、三三年中に第八号から第二二号が、三四年には第二九号までが発行されたようであるが、現物を見られない。『社会運動の状況』は、一九三三年の活動状況として「建国祭反対運動、靖国神社招魂祭反対、盂蘭盆闘争等を巧みに宣伝煽動しつつあり。又一方一般的闘争としては、マルクス五十年記念祭、小林多喜二労農葬の参加、メーデー闘争等を宣伝し、組織的方面に於ては工場農村を基礎として大衆を獲得せむとし、同盟員一万人カンパを行ひ、又一面学生に對しても其の手を述べ、曩にSCM革命的反対派を本同盟に合同せしむると共に、本年四月には『関東地方学生協議会方針テーゼ』なるものを発表し、其の組織運動を進めつつあり」とあるにすぎない（五〇二ページ）。

『社会運動の状況』一九三四年版は、もっと簡略に「本年度に於ては警視庁の嚴重なる取締の結果、機関紙『われらの世界』第二十三号より第二十九号迄発行したるに過ぎず、現在殆ど潰滅の状況にあり、同盟員一〇〇名と称せらる」（二八八ページ）と記すにとどまっている。この年の五月二九日に組織の責任者であった川内唯彦が検挙され、『われらの世界』は五月三〇日付第二十九号が最終号となっている。ほぼこの時期に、戦無はその組織的活動を停止した。

一九三四年には、共産党系の諸団体のほとんどが活動を停止しており、戦無もその例外ではないといえる。特高警察をはじめとする国家権力との闘争に後退を余儀なくされた共産主義運動の一現象といえるが、反宗教運動は、それだけで片づかない問題がある。かの労働者の祖国とされたソ連においても、このころより反宗教キャンペーンは急速

に下火になった。一連の各国共産党も、やがて人民戦線のもと、宗教家との反ファシヨ統一行動を推進していく。日本において一九三〇年代後半まで活動が続けた唯物論研究会は、かつての『プロレタリア科学』『プロレタリア文化』誌上をかざったような形での反宗教キャンペーンを行うことはなくなった。

一九三二年に「プロレタリア反宗教運動」の論文を岩波書店発行『教育科学』第九分冊に発表した林達夫は、のち一九四一年四月の『都新聞』に「宗教について」という短文を寄せている。

「明治初期の迷信対合理主義の闘争とほぼ相似たものが、宗教対一部マルクス主義者の、数年前に行われた闘争であろう。それは残酷な言い方を以てすれば、一つの笑劇に外ならなかったようだ。二重の意味でそれは漫画でしかなかったから。その時代は明治初期と等しく宗教と合理主義とを共に強化するような社会的状況にあったことは確かであろう。けれども戦闘的無神論者であると称した一部マルクス主義者は、その粗雑極まる素朴合理主義を振り廻す点では明治啓蒙主義者のそれに優るとも劣らなかったようだし、それにその反宗教運動なるものはソヴェト・ロシアの猿真似の域を一步も出でぬ恐ろしくスコラ的なものでもあったのだ。」

「興味のあることは、由来、世界のどこにおいても反宗教運動にして多少とも実効ある成功を収めたためしは、未だ一つもないということである。『無神論の国』ソヴェト・ロシアがその最もいい例であろう。」

ここでは戦闘的無神論＝マルクス主義が世界の目を眩らせたあの大がかりな宣伝部隊を以てその全領域から宗教を一掃する意気込みで一大進軍の歩武を進めたのであった。しかし今日誰の目にも蔽えない事実が、マルクス主義はいつの間にか少なくとも宗教に関する限りでは『腐敗せる自由主義』への転向を決意して、音のしない休戦ラッパを吹き鳴らし、有耶無耶のうちに宗教と一種秘密的な不可侵条約を結んだらしいことである。」（『林達夫著作集』第三巻、一九七一年、二八七～二八八ページ）

林達夫は一九三〇年代前半に展開された反宗教運動をたんに嘲笑するためにこの小文を草したわけではない。それはあまりにも容易なことだ。反宗教闘争は一連のプロレタリア文化運動のなかでも、内容的にも粗雑であり、組織的

にも微弱なものの筆頭であった。『司法研究』にある『プロレタリア文化運動の研究』六百数十頁のうち反宗教運動には、わずか一〇ページほどをさいているにすぎない。共産主義運動としても、宗教批判運動としても、さしたる成果を収めえなかった反宗教運動に対し、取締当局は大きな関心をもたなかった。

SCMや新興仏青の宗教改革の芽をつみとる最大限綱領主義、世界観的対立の直結、宗教的習俗をも機械的に否定し、すべての非政治的なものを政治化してとらえる政治主義、これにコミンテルンと日本共産党デーゼの直輸入が加わる。このような運動の貧しさにもかかわらず、この運動が日本における無神論の発展に寄与したとして積極的評価を与えたのは本間唯一「反宗教運動」（『日本宗教史講座』第四巻、一九五九年、三一書房）であるが、この論文自体が、かつての戦無と同様の政治主義的感覚を自らに一体化して書かれており、今日の批評に耐ええない。何よりも林達夫がすでに指摘していた、無神論の発展に寄与しなかったという評価に答えていない。

唯物論の発展に寄与したかどうかという評価基軸のとり方に問題があるとし、「宗教を利用した反動支配一般と区別される国家神道支配下の独自の課題の解決を、日本のマルクス主義が、いかに担い、または担いえなかったか」という問題視角をたてた赤澤史朗「一九三〇年代の反宗教運動」（東京歴史科学研究会編『転換期の歴史学』一九七九年、合同出版社）がある。その結論において「戦無の運動を通観すると、その運動は日本社会に十分対決しえず、また日本社会に規定された自己の認識に乏しかった」とし、このことは「日本社会に内在する変革の契機を探ろうとした三木や服部の論議を、輸入理論によって無難作に批判した不幸な出発に由来していた」としている。教えられることの多い論文であったが、赤澤が付記するように、紙数の関係で省かれた教化事業反対運動の叙述があれば、この問題意識をさらに展開しえたと思われ、続稿を期待したい。また一九三〇年前後の「マルクス主義と宗教」論争の論争

史としての整理も、それぞれの論者に即したより精緻な展開を期待したい。

小稿は、どちらかといえば、共産主義運動としての反宗教運動の運動史を、限られた、主に中央の発した文書からさぐったものである。同志社大学人文科学研究所に、ごく少量ではあるが若干の原文書を所蔵しており、この紹介を兼ねたものである。